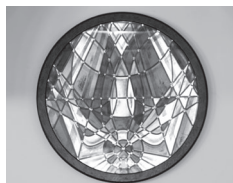


# カトリック山形教会報

# かすみ

# 5

2019.5.26



カトリック山形教会

〒990-0039 山形市香澄町2丁目11-15 TEL.023-622-3574 FAX.622-3590  
ホームページ <http://www.catholic-yamagata.com/>



## 弱さを通して働くイエスの力

主任司祭 千原通明

主のご復活おめでとうございます。

今年の復活節第3主日の福音は、ヨハネ21章から読まれました。そこで、ペトロは「わたしは漁に行く」と言い、他の弟子たちも「わたしたちも一緒に行こう」と言ってティベリアス(ガリラヤ)湖に行き、漁をしました。すでに彼らは復活したイエスに2度も会い、喜びに満たされていたはずですが。しかし、漁師という元の生活に戻っていかうとしたのです。それは、イエスに、再び背を向けることを意味したのではないのでしょうか。しかし、夜通し漁をしましたが何もとれません。夜、すなわち暗闇は、この世の光であるイエスの不在を象徴しています。イエスがそこに現れると夜明けが訪れました。そして、イエスの言われる通りにするとおびただしい数の魚がとれたのです。岸に上がってイエスと3度目の再会を果たした弟子たちは、背を向けるよ

うなことを悔いながらも、何も言えませんでした。しかし、イエスは何もとがめず、弟子たちとの絆を、食事を通して深めていきます。その後ペトロに3度も「わたしを愛するか」と尋ねたのは、彼がイエスを3度否定したことをゆるし、愛の絆を修復し強め、いよいよペトロを派遣するためでもありました。イエスは、ペトロや弟子たちの弱さをご存じの上で派遣していきます。そして、彼らの弱さを通して、イエスの愛が真に働いていったのです。

「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(2コリント12章9節)

わたしたちも、ペトロと同様に弱い存在です。しかし、その中で働くイエスの力に信頼して歩いていきます。



# 佐渡キリシタン塚巡礼に参加して

沼沢敬志

去る5月11日に、新潟地区主催の佐渡キリシタン塚巡礼に参加してきました、新潟地区のほか、糸魚川の信徒と、私達山形からの5名を含め70名程でミサを捧げました。

山形を午前5時に出発し、帰りは午後9時過ぎと1日がかりの日帰り旅行でしたが、天候にも恵まれとても良い体験ができました。

佐渡の殉教地は、佐渡島東部の両津から西部の相川地区までの「中山道(なかやまみち)」の中山峠付近にあるため、麓の道路でバスを降り、軽自動車がやっと通れるくらいの未舗装の旧街道を、黙々と30分程歩いて登りやっと辿り着ける所の塚で、キリシタン百人塚とも呼ばれ、多数の信者が打首にされたと伝えられています。ここで殉教されたキリシタンは身分が低い者貧しい人々であった為か名前は一切記録に残っていないとのことです。

ミサは、菊地大司教が主司式、新潟地区の大滝神父、町田神父、ラウル神父、高橋神父、坂本神父の共同式でミサが捧げられ、福音朗読はヨハネによる福

音書6章60-69節が読まれました。

ミサの説教で菊地大司教は、「信仰を生きる」ということは「面倒で困難なこと」一般的な価値観から見れば「実にひどい話」であるかもしれないが、その「面倒で困難なこと」を真面目に一日一日「信仰を生きる」ことで、喜びが心の底から湧き上がり「心が満たされる」。また、「信仰を生きる」ことは、一人ではなく「仲間と共に生きていくこと」であるから、共に助け合って生きていくことが大切なことだと話されました。

日々の生活では、どうしても生き易い方へ流されてしまう自分の生き方にあらためて気付かされましたが、殉教者のように実直に「信仰を生きる」ことは、現実には難しいことだと思います。神様によって教会に集められた仲間と一緒に手を取り合って一歩一歩あゆんで行きたいと気持ちを新たにしたい一日でした。

巡礼の数日前までは天候が心配されていましたが晴天で風も弱く、新緑の森の中に木漏れ日が差し、うぐいすの鳴く殉教地でミサに参加できたことを神様に感謝します。



# 復活祭(ご復活おめでとうございます)

Happy Easter(英語)、Maligayang Pagkabay(タガログ語)、Chúc mừng Lễ phục sinh!(ベトナム語)などの、お祝いの言葉でミサが始まりました。

復活祭は、基本的には「春分の日後の最初の満月の次の日曜日」に祝われるため、今年は4月21日の復

活の主日ミサとなりました。

ミサ後のパーティーでは恒例の持寄りのお料理が並び、和やかな中で、大勢の信者さんが、共にお祝いをされました。(広報部 K.S)

## 四旬節黙想会 「キリストの十字架から伝わってくるメッセージ」

2019年度四旬節黙想会講話が3月31日、森一弘司教(東京教区・真生会館理事長)により行われました。

皆様ご存じのように森司教様は多くのカトリック関連の著書をお持ちの素晴らしい司教様です。今日の講話も、聖書を基本とした中に多くの一般信者さんとの交わりを通して、分かりやすく穏やかに温かい雰囲気の中でお話をして下さいました。

参加されたお一人お一人が「キリストの生涯」の中にご自分のこれまでの歩みを重ね合わせながら大きな恵と喜びを感じられたことと思います。参加された方約50名の中から、3名の方に感想をいただきましたので皆様と分かち合いたいと思います。(広報部 柴田)

### 十主の平安 あの頃。…頓珍漢の弁明、そして感謝

洗礼者ヨハネ 市中 博

3月24日(日)のミサの後、広報部の柴田さんから「かすみ」掲載記事「森司教様の講話の感想文を書いてくれないかと頼まれ、一瞬迷ったが心の中で「受けなさい」と言われたような気がして「わかりました」と引き受けた。感想文うまく書けるだろうかと心配になったけど、受けたからには逃げられない。当日、森司教様のお話を耳を澄ませて聴いていたのだけれど、その時は講話の趣旨をうまく捉えることができなかった。これでは感想文が書けないと、帰ってから、取ったメモで思い返しながらかえ続けた。

司教様のお話の趣旨は、主が十字架に架り、その苦しみの中での、最後のお言葉をどう捉えるかということだったと思う。マタイ福音書「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのですか。」ルカ福音書「父よ、私の霊を御手にゆだねます。」

それを二つの福音書の視点、マタイ(現実の厳しさ、人々の無関心、無理解)、ルカ(主の愛、癒し、優しさ)との対比によって話を紐解かれていった。二つの福音書に随伴する形で、御言葉や、信者さんとの対話、出来事などを話された。

話は変わるけど僕は妻に「お父さん、なんか反応普通の人とズレテルのよね。他の人が説明聞いて皆、納得しているのに変な細部にこだわるし。」とよく言われる。ある時、妻がテレビを見てジーンとしているのに水を差して怒られた。あるアーティストが「初恋」という曲を歌っていた。僕と年は余り変わらないのに若々しいのに羨望を覚えたのか、ついうっかり「四十にもなって初恋はないよな。」と言ってしまった。サア大変、山の神の怒りは凄まじい。息子も迷惑そうな顔をして「ドラマの主題歌なんだから仕方ないでしょ。」と妻の味方。親父の

威厳は地に墜ちた。そんなこんなで今まで何とかやってきました。でも感じ方、想うことは変えられないし、それ無しには感想文も書けない。だから僕は僕なりに心に引っ掛った処を書こうと思います。

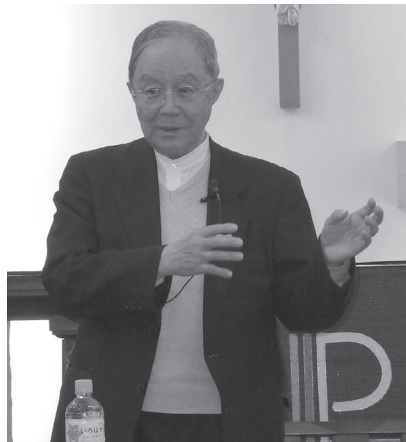
それは司教様が、世間との軋轢などで心が傷いた女性に「ウイークデイの教会はもっと静かですよ。」と

いった箇所だった。聖書にも“疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。”

“私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。”と書いてあるし僕が初めて教会に来た時も、どうしたらいいか途方に暮れていた時だった。人のいない教会に一人ぼつんといるのが好きだった。主よ、感謝しています。今は教会で人と話すのも楽しいけれど、誰もいない教会も静かで心安らぐことも知っている。中国のことわざかと思うけど

“李下、冠を正さず”という言葉がある。日本人は無意識のうちに性善説を信じているのか、ある時アメリカ人の神父様が冷蔵庫に鍵を掛けているのを見て「人を信用していない」と怒ったらしい。僕も目の前で鍵を掛けられたら嫌な気になるだろう。でもよく考えてみると鍵を掛けていない時、誰かに盗み食いをされたのかもしれない。だからジャン・バルジャンじゃないけれど御言葉の“私の求めるのは憐みであって、いけにえではない。”の新バージョンかもしれない。それに犯人探しをしては愛が冷えるだろう。冷蔵庫を置かないという選択肢もあるけどそれも困るだろうし、まあ日本では冷蔵庫を空に近い状態にしているのがいいと思う。開かれた教会にするのも創意工夫が必要だと思います。

最後に、森司教様の講話を聞いて考え聖書がますます好きになりました。感謝します。



# わたしは神 おまえの神 (詩編5)

インマヌエラ 工藤陽子

イエスは最後の人間の居場所。  
苦しみ、悩みも、信仰をもって、  
忍耐する事ができる、  
包み込んで、くれる所。  
一人、ひとり神の子。  
愛を貫くことの難かしさ、  
神の愛を信じて委ねる。(森司教)

感謝とごめんなさい。(森司教)の言葉を大切に、  
神が共にいて下さる事を信じて、一日を過したいこの頃、  
晩年を生きている「今」だからこそ、誰も見たことのない美しい神を敬まい、愛し続け、祈りたいものです。

イエスは究極の人間の居場所。

わたしの神 わたしの神(詩編22)

預言者ルカ、マタイ、夫々の受け取り方が違うように、  
私たち一人、ひとり、容姿、考えること、相手の言葉の聞きかた、皆違い、同じ人は一人もいない。

自分を大切に、そして違う隣人を愛し続ける広い心、  
信仰の人として成長したいものです。

間違ったり、思い込んだり、心身の老いを友としているこの頃

人を許せる。

ねばならぬ

自分のためより、人のために祈れる。

老いを素直に受け入れられる信仰の力に、感謝し、  
友人にも伝えたいものです。



## 森司教様のお話を聴いて

フランシスカ 富樫年子

3月31日(日)四旬節の黙想会が森一弘司教様を招いて行われました。

“十字架から伝わってくるメッセージ”という演題でした。私は森司教様にお会いするのは今回が初めてで、いつもカトリック新聞に載っている真生会館の館長という固いイメージしかなく著書も読んでいませんでした。黙想会のあと女子パウロ会の“あけぼの”最終号に載っていたコラムを読んで新たな司教様の一面を知ることが出来たのです。

七才の多感な少年期に横浜で空襲を体験し“この世界に存在する全てのものは、破壊されていく。確かなものは何もない、すべてはいずれ崩れ落ちてゆく”という思いがいつも心の中を支配していたと…。初めて司教様の心の闇を知ったのです。私のやみは、6才の時の父との別れでした。赤いランドセルとベレー帽とワンピースを床の間に揃えて家を去ってしまったのです。今でも不思議なくらいその時の光景が脳裏にやきついているのです。

イエスの受難についてはマタイとルカの表現の違

いはありますが、何の罪もないイエスが私たち全人類の罪を負って十字架上で殺されたのです。“イエスを殺せ”と叫んだ群衆は私たち自身なのです。

正義をつらぬく事の難しさ、特に仲間が一人もいないと感じた時の孤独感と無力感…。もし自分にこのような状況が直面したときこそ“イエスさま助けてください”と叫ぶのです。イエスの十字架での死は、誰がみても悲惨な出来事であり弟子達にとっては全ての終りでした。イエスの死は自分たちの罪の結果でした。しかし、何の前触れもなくイエスは弟子たちに現れたのです。私は復活の水曜日で読まれるエマオへ向かっている弟子たちと共に歩かれるイエスの復活の福音が好きです。情景が浮かぶのです。

復活したイエスは自分のほうから弟子たちに会いに来てくれたのです。

自分の力では何もできないのです。“主よ助けてください。私のところに来て下さい”といつも祈れる私でありますように…。



## 自分たちの教会にもっと関心を 2019年度・総会

2月24日(日)ミサ後、2019年度の総会が開かれ、私がこの場に立つのは5度目になります。昨年の総会において、これまでの信徒使徒職協議会が小教区評議会となり、総会のあり方もこれに伴い大きく変わりました。司教様から自分がこの教会でできる何らかの部に所属し、キリスト者として証しすることが求められました。また、総会は議決機関ではなくなってから一年が経ちました。しかしながら、これまで同様各事業が行われていることもあり、実感としては何も変わらず信者の皆さんもどこがどのように変わったのか分からない方がほとんどではないでしょうか。

年々参加者が少なくなる総会ですが、山形教会も他の教会と同様に高齢化が進み、長時間の会議は辛いものがあるのでは…。また、総会に若い人の姿が見られないのも関心の薄さを表しているように感じます。さらに近年、留学生や研修などによる教会の国際化もその理由のひとつではないでしょうか。今では毎週のミサにおいでになる信者の約2割は日本人以外の信者さんです。

4月に新潟で行われた新潟教区の信徒使徒職協議会の会議においても、海外の信者さんに維持費納入の説明の難しさが取り上げられました。海外には教会維持費などという概念はなく、献金を納めればそれですべてです。新発田教会の佐藤神父から新潟教会のロレンゾ神父による維持費の重要性の説明会を行いましょうか…と、提案が出されました。

総会に出席した信者さんは会計の説明からも教会の財政が逼迫している状況がお分かりになったと思います。また、これまでの総会では「お金」のことはタブーになっていたのか、代表が信徒の皆さんに「維持費」の納入を強くお願いすることなどありませんでした。しかしながら、もはや体裁を繕っている状況ではないことを皆さんに知っていただきたく、今回の総会と、この紙面にてご報告させて頂きました。

どうか、皆さん、『自分の教会にもっと関心をもってください』。そして、傾きかけている「教会会計」を立て直すべく、ご協力をよろしく願いいたします。

(カトリック山形教会 評議員代表 小林雅人)



### おかえりなさい、エリック神父

学生時代を山形で過ごされ、現在は大阪教区の司祭となられたエリック神父が1月27日山形教会でミサを捧げられました。更にかつて当教会の「日曜学校」でご指導しておられた植田夫妻の提案で叙階のお祝が行われました。



皆様からのメッセージ

# 過越しと分かち合い

ルドビコ茨木 陣野重雄

戦後の洋画ブームが一段落した頃“十戒”というアメリカ映画が山形でも上映された。市民が行列して鑑賞した。われわれは天主の十戒だとすぐ思ったが、ダイナミックな特撮が映画ファンを沸かせた。

圧巻はモーゼがエジプトを追われたイスラエルの難民集団を引き連れ脱出するシーン、紅海が裂けて開けた水の壁を急ぎ渡るところ。エジプト軍だけが海に沈没、誰が見てもワーッと驚いた。時は紀元前1300年、旧約聖書の出エジプト記である。

キリスト教では復活祭までの春待ちの四旬節に過ぎ越し祭とキリストの受難と聖なる死を深く思い起こし祈りながらこの週を過ごす。旧約の風俗習慣など興味深い。

エジプト脱出の過ぎ越しの際には旅支度で門口に子羊の血を塗り、その肉と種なしパンを分けて食べて早朝に脱出する。種なしパンは早く焼けるようにふくらし粉を入れない。極めて合理的。信

者達も聖木曜日には種なしパンをいただく。

旧約聖書の時代は、羊は神への生贄にもされて来たこともあり、子羊はくせがなく美味。豚を食べない国もあるので現代でも正餐のメイン食材とされている。わが国でも明治の文明開化期から大正にかけて海外から国賓を迎える宮中晩餐会のフランス料理に使われるようになった。天皇の料理番といわれた秋山徳蔵シェフの手によるフランス料理にも日本の食文化として子羊の料理が好評だったとも。ここからホテルやレストランに普及していった。余談ではあるが昭和天皇は子羊のトマト煮や子羊の香草パン粉焼き(秋山徳蔵の陛下の好物レシピという著書から)などが好きだったという。

聖書には食べ物を分かち合う食事の記述が多く、例えば山上の説教や祝宴など同じ釜の飯を分かち合う箇所がある。山形教会での祝日のごちそう持寄りパーティなども分かち合いの心がよい習慣になったと私は勝手に思っている。



上映当時の懐かしい「十戒」のポスター



国籍もさまざま、食事や歌をともにする山形教会の「分かち合い」

# いらっしやい、準備は すっかり出来ています (2019世界祈祷日)

今年の世界祈祷日は3月1日、午後1時30分より日本基督教団・山形六日町教会で行われました。参加教会は山形、天童から10教会、参加者は53名でカトリック山形教会からは千原神父様と9名の信者さんが参加されました。

礼拝は、それぞれの地区の実行委員会や教会、教会女性会のリーダーシップの下に、テーマ国が作成した式文により世界的な規模で毎年3月第1金曜日に行われています。

今年の式文は、ヨーロッパで最も小さな国の一つスロベニアの女性によって作成されました。

テーマの中心は、招きです。いらっしやい、そうすればこたえてもらえます—すべての準備は整っています。ここに来て愛のみ国を賛美し、感謝し、宣言しましょう。

この招きとは招待客が断ったので、路地や通りにいた者たちを招待して催した「イエスの晩餐会のとえ話」に基づいています。そして祈りは、スロベニアが社会主義・共産主義だった時から今日までの政治的、経済的状況を反映しているなかでの難民や移住労働者、母、祖母、妻、ジプシーと呼ばれて人々の話を聞きながら、私たちは今まで不正や不当に対して沈黙していたことに赦しを求め、私たちの心を開いて思いやりと理解を持てるようにと神に祈り、自由と正義と平和への道で助けを求める人々と互いに支え合えるようにと各教会の方々々が各立場になり先唱・答唱し合い祈りが捧げられました。

最後に、簡単な茶話会が持たれ、今日参加された各教会の個人紹介そして活動、リラックスした中で自教会のアピールなど楽しい一時の中終会となりました。

注:世界祈祷日は1887年にアメリカの女性たちが移住者や抑圧されていたひとたちを覚えて始まりました。2度の世界大戦の経験から、地球規模の視野を持って和解と平和を求める祈りによる世界的な運動に発展し毎年世界的なネットワークを持つ女性たちと祈りと行動を続けています。

また、会場となりました日本基督教団・山形六日町教会は山形文翔館(旧県庁)裏にある大正3年に献堂された教会です。

(本文について、配布式文より抜粋使用させて載せた箇所があります)

(広報部:H・S)



## TOPICS

### ようこそブライアン助祭

昨年の5月まで茨城、山形において語学研修及び小教区での司牧体験をしていたブライアン神学生が6か月間の最終研修を終え、2月2日フィリピンにおいて助祭叙階を受け、日本に帰って来ました。これから司祭叙階まで、山形教会、新庄教会で奉仕します。なお、小教区での奉仕と共に日本語の勉強も続けます。



### 新侍者誕生

昨年12月24日、主の降誕ミサにおいて受洗した由崇君が、2月10日侍者デビューしました。



## 教会墓地のフェンス工事と門扉について お知らせとお願い

皆様には日頃、教会墓地について種々お世話を頂きまして有難うございます。おかげをもちまして街中の墓地として形を整えてきた感もありますが、墓地の外郭整備として南側道路沿い、門から東側が未整備のまま残っています。このたび墓地管理部でその対策と道路の除雪問題解決策を含めてフェンスの設置、以前から問題となっていた駐車場への無断駐停車について、防止策等を検討し、これを3月14日の小教区評議会に諮り検討して頂き承認を得ることが出来ました。

フェンス工事は、現在の大谷石の塀高に合わせてブロックを積みその上にフェンスを設置しま

す。

門から西側は既存のフェンスに高さ600mmのフェンスを載せて、同一の高さとします。

門扉としてのチェーン使用ですが、皆様をお願いします。

「墓地へ入るときは各自がチェーンをはずし、墓地を出る時はチェーンをもとのように張って下さい。」

入出場の際は若干手間がかかると思いますが、よりよい墓地の保守・管理にご理解とご協力をお願い致します。

(墓地管理部長 沼沢忠一)

## 「皆様からのメッセージ」に寄稿を！

教会誌「かすみ」の発行につきましては皆様には何時もいろいろ御協力をいただきまして大変有難うございます。

「かすみ」の発行につきましては、前にも書きましたがその年々の復活祭、聖母被昇天祭、主の降誕祭をメインとして黙想会、洗礼式、祝賀会、その年々の行事等に関する記事等について寄稿いただいておりますが、毎年同じ行事等であってもその感じる内容は全て違います。当たり前と言われそうですが、私は記事を提供して下さる一人一人が感じられた事を率直に表して下さっているからで一人一人の記事が大事だと思います。

これからがお願いです。今回、これまでに特に設けなかった「皆様からのメッセージ」(仮称)のページです。陣野

さんの記事がいいですね!もともと皆様から自由に使っていただきたいページ、典礼行事や教会行事にあわせた思い出、希望等、好きな言葉、皆様に知らせたいこと、部活動について、俳句、詩等の披露、教会外でのこと“何でも”寄稿していただきたいと思います。もちろん上記した定例行事に関してもです。

これまで2017年4月号より今号まで8回発行のなか広報部記事を除き丁度20名の方に原稿をいただいております。これは発行目的でもある、教会全信者さんへのお知らせ、分かち合い、教会の歩み(歴史)の記録です。分かち合いをしながら皆様の歩みを記録していきたいと思っております。(広報部 柴田)